

「土の人」と「風の人」が混ざったとき

山川徹氏に聞く！ ラグビー日本代表は、だから強くなった

ラグビーの魅力を知った勧誘チラシ

——ラグビーW杯が近づいてきました。山川さんご自身もプレーしていたそうですね。

ラグビーファンだった祖父の影響で、子どものころから新日鉄釜石や神戸製鋼の試合をテレビ観戦していました。漠然とラグビーに憧れていましたが、幼いころからやせっぽちで自分にはできないだろうと諦めていたんです。ただ進学した山形中央高校が、花園（全国高校ラグビー大会）の常連で、部長の先生が配っていた勧誘チラシを見て、自分もできるかもしれない、と入部届を提出しました。

——どんな内容のチラシだったんですか？

十五人でプレーするラグビーの多様性が書かれていました。ラグビーには十のポジションがあり、太っていて足が遅くても、身体が小さくても、エンピツのようなのっぽでも、特技や長所を活かせるポジションやプレーが必ずある。たとえば、身体が小さくて不器用でも、自分よりも大きな相手に怯まずにぶつかってける勇気があれば、チームの仲間に認められて活躍できる、と。そのチラシに背中を押されて入部しました。そのおかげで、高校二、三年時に花園に出場でき、大卒にもラグビー推薦で進学できました。

——異なった特徴を持つ選手が活躍できるのがラグビーの魅力なのですね。

そう思います。前回W杯（二〇一五年）の一年前に日本代表キャプテンのリーチマイケル選手に話を聞いたのですが、彼の言葉が勧誘チラシに重なりました。

「チームに、大きな相手にもひるまずに激しくタックルに入っていく選手がいたとします。その気持ちがメッセージとなって、チームメイトに伝わっていく。キャプテンが、怖がらずにタックルに行く姿を見せ続けられれば、『オレもやらなきゃ』と仲間も奮い立つし、信頼も勝ち取れる。逆に腰が引けて、相手に弾き飛ばされたら弱い気持ちが伝わってしまう。すべてのプレーがメッセージになる。それが、ラグビーです」

リーチ選手の話聞いて、もうひとつ思い出したことがあります。十年以上前に取材のために通っていた、岩手県盛岡市にある障害者支援施設の緑生園です。緑生園は戦後間もない時期、知的障害を持つ青年たちの自立と社会参加をめざし、創設されました。面白かったのは園で生活する若者たちにラグビーを教えているところ。当時の園長がこんな話をしていました。

「ラグビーは怖いからといって逃げるわけにはいかない。どんなに大きな相手に対しても、仲間やチームのために、ぶつかっていく。前に進んでいく。社会で自

立するうえで、その気持ちが大切なんです」

ラグビーをとり組みはじめた当初、ボールを持った教員が走って行くと園生たちは「危ない。みんなよける」と逃げまどっていたそうです。でも、毎日の練習を通して、タックルができるようになる。やがて社会人のクラブチームと試合ができるまでに成長していきます。日本を代表するリーチマイケルにとっても、楯円球にはじめてふれる若者にとっても、ラグビーが持つ魅力は変わらないと感じました。

三十一人中、十五人が外国人の日本代表

——ラグビーを見ていて不思議だなと感じるのは、日本代表にたくさん外国人選手がいることです。

八月二十九日、W杯日本大会の日本代表メンバーが発表されました。三十一人のメンバーのうち、十五人が海外出身のプレーヤーです。インターネットでは「ガイジンだらけで日本代表とは呼べないんじゃないか」「応援する気にならない」などという書き込みを見ました。違和感を覚える人もいるのでしょうか。

しかし海外出身選手がプレーしているのは日本代表

●やまかわ・とる 1977年生まれ。ノンフィクションライター。主な著書に調査捕鯨同行ルポ『捕るか護るか？ クジラの問題』（技術評論社）、『カルピスをつくった男 三島海雲』（小学館）など。